

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (77) ヤロブアム

北イスラエルの王とされたヤロブアムはエフライムの西北部ツェレダで、父ネバト、母ツェルアの息子として生まれました。父は亡くなり、寡婦の息子として育ちました。父に代わって家を守るため、ヤロブアムは懸命に努力し、ソロモンに働きぶりを認められて、労役全体の監督に任命されるほどの有能な人物です。けれども彼を支える財力、軍事力、有能な家臣などは持っていませんでした。



ヤロブアムのベテルの祭壇 Gerbrand van den Eeckhout

まず、ヤロブアムは由緒ある町タシケムやペヌエルを築き直し、体制を整えました。また、民がエルサレム神殿に詣でるならば、再び、彼らの心はダビデ王家に向かうだろうと恐れ、民の心を自分に向けようとしてしました。そして「契約の箱」を一時置いていたベテルに祭壇を築くことにしました。

彼はよく考えたうえで、金の子牛を二体造り、人々に言った。「あなたたちはもはやエルサレムに上る必要はない。見よ、イスラエル

よ、これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神である。」彼は一体をベテルに、もう一体をダンに置いた。(列上 12:28-29)

イスラエルにとって、また、古代人にとって、神に犠牲を捧げ、祈ることなしには生きられなかったのです。アロンの造った「金の子牛」によって裁かれた故事を忘れたのでしょうか。豪華に刻んだ像の前で祈る異教の祭壇は力強い、これこそ、民をひきつけ、まとめられるパワーだとヤロブアムは感じたのでしょうか。レビ人ではない者を祭司に任じ、自らも祭司として祭壇に登り、香をたきました。

ヤロブアムが決めた祭りの日に、ベテルに、ユダから一人の預言者がやって来て、祭壇に声をかけました。彼は「やがてダビデの家にヨシヤという男児が生まれ、この祭壇でこの祭司たちを生贄として捧げる」という恐ろしい言葉を告げ、「祭壇は裂ける」とも言いました。ヤロブアムは恐れてその予言者を捕えよと命じ、自ら手を伸ばして捕えようとしてしました。けれどもヤロブアムの手は萎えてしまったのです。何とか元通りにしてもらいましたが、ヤロブアムは不安になりました。その後、息子が病気になり、シロの預言者アヒヤに託宣を求め、妻を行かせました。アヒヤは、

『イスラエルの神、主はこう言われる。わたしはあなたを民の中から選び出して高め、わが民イスラエルの指導者とし、ダビデの家から王国を裂いて取り上げ、あなたに与えた。しかし、わが僕ダビデがわたしの戒めを守り、心を尽くしてわたしに従って歩み、わたしの目にかなう正しいことだけを行ったのとは異なり、あなたはこれまでのだれよりも悪を行い、行って自分のために他の神々や、鑄物の像を造り、わたしを怒らせ、わたしを後ろに捨て去った。それゆえ、わたしはヤロブアムの家に災いをもたらす。』(列上 14:7-10)

と告げました。「病気の息子の死、ヤロブアムの家の滅亡、(北)イスラエルは地から引き抜かれ、ユーフラテスの彼方に散らされる」との恐ろしい預言を受けたのです。アヒヤはソロモンの偶像礼拝に対しても非常に怒り、そのためヤロブアムを選び、用いたのに、ヤロブアムは信仰の心ではなく、力強い形を求めたのです。統治の基本に信仰がなければ、それはもはや神の民にはならないのです。

治世の終わり頃、レハブアムの子、アビヤムがヤロブアムのベテルの祭壇を糾弾し、「エルサレム神殿でこそ、正しい、伝統的な礼拝が捧げられている。(北)イスラエルは主と戦っているのだから、勝ち目はない」と言って、兵士や祭司と共にヤロブアムを攻めて来ました。アビヤ(ム)はヤロブアムを追撃し、ベテルとその周辺の村落、エシャナとその周辺の村落、エフライムとその周辺の村落を獲得した。ヤロブアムはアビヤ(ム)の時代に二度と勢力を回復できず、主に撃たれて死んだ。(歴下 13:19-20)